

今日は復活前主日です。このイースター前の1週間に、教会は、明るい礼拝と暗い礼拝の両方を、行進を伴って体験することになります。明るい礼拝とは、今日、礼拝の最初に、聖歌137番を歌って、イエス様がエルサレムにロバに乗って入られたことを記念したものです。この時、人々は手に手になつめやしの枝を手にとって、イエス様を歓迎したことを記念して行進します。

現在でも、エルサレムでは、東のオリーブ山の向こう、ベトファゲと言われる所から、オリーブ山を越えて、エルサレムに向かって行進する、そんな礼拝を行なっているはずで

それでは、もうひとつの、暗い礼拝とは何なのでしょう。暗いと言っては語弊があるかもしれませんが。日曜日の礼拝が、楽しい礼拝であるのに対して、悲しい礼拝と言ったらいいかもかもしれません。金曜日に、エルサレム市内の、元ポンテオ・ピラトが住んでいた官邸の跡、現在は小学校が建っているのですが、そこから、イエス様の墓がある聖墳墓教会まで、聖金曜日には行進します。もともと、ここはとても有名な場所で、ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）と言われるところで、聖地巡礼をする人たちは、曜日に関係なく、イエス様が十字架を負って歩かれたところを、歩いています。

つまり、復活前主日には、イエス様をメシアとして、大歓迎する行進。そして、聖金曜日には、十字架を背負う行進をするのです。

金曜日の行進の道を「悲しみの道」と呼びます。この「道」というのは大切な言葉です。

聖書では、キリスト教のことを「道」と呼んでいるのを皆さんはご存知でしょうか？

使徒言行録でよく出て来るのですが、例えば、有名なパウロがサウロと呼ばれていた時に、イエス様に声をかけられ回心した場面です。

#### ◆サウロの回心

9:1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、  
9:2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。

どうして、キリスト教のことを「道」というのか、皆さんは想像がつくでしょう。

イエス様は、ヨハネ14章6節で「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」このように言われていることなども関連があるでしょう。

クリスチャンになる、ということは、イエス様の歩まれた道を、その跡を踏みしめて歩むことです。

もう亡くなったカトリックの神父なんですけど、ジョルジュ・ネラン司祭は、「おバカさんの自叙伝半分」という本の中で、「キリスト教徒はイエスのファン」ということを書いていました。

ちょっとその部分を抜き出してみましよう。

『キリスト教は、キリスト自身の教えたものであるよりも、キリスト自身に関する教えなのだ。キリストの教えに従うというより、生きているキリストと結ばれることなのである。』

『キリスト教は私たちにいろいろな人生観を運んできた。しかし、そういった思想体系がすなわちキリスト教なのではない。』

『また、キリスト教にはさまざまな規則めいたものがある。しかし、キリスト教はそういう道德体系でもない。』

『キリスト教には、教会という信者どうしのつながりがある。しかし、教会がキリスト教なのではない。教会は、生きているキリストへ導く組織なのだ。』

『キリスト教の核心はあくまでキリスト自身にある。だからこそ、信者はイエスのファンなのである。』

イエス様に魅力を感じて、ついてゆく、それがイエスのファン、キリスト教徒である、ということなのでしょう。

さて、そこで、この後は私の考えですが、ファンには2段階がある、ということをお願いしたいのです。

ファンの最初の段階は、好きなスターを追っかけて、その人のことを知りたい、身近に感じたい、という段階でしょう。好きな歌手のCDを聴いたり、写真集などを手に入れたりします。私などは、iPadに入れて、しばしばその音楽を聴いたりします。

クリスチャンは、イエス様のファンですから、イエス様のことを知りたくて、聖書を学び、また関連の本を読んだり、イエス様の生活された所へ行きたい、ということで、聖地旅行をしたりします。

しかし、いくら旅行にお金をかけても、これらの行動は未だ、第1段階。キリストを知りたい、追っかけのファンに過ぎません。それはちょうど、復活前主日に、イエス様が、ベトファゲからエルサレムに入られるのを、なつめやしの葉を持って、追っかけている群衆のようなものでしょう。

もちろんこの段階のクリスチャンの活動は、ずっと続けて行く価値があるものです。

しかし、第2段階があります。ファンというのは、ただスターの追っかけをしているだけでは、満足できなくなるのです。それは、あたかも自分がそのスターになったかのように行動することです。

好きな歌手の歌を、ファンが、あたかも自分がその歌手になったかのような気持ちで歌うことは、素晴らしいことです。どうも「ものまね」というのは、芸能界では、コメディアンとして、自分自身ではないものを演じているので、少し低く見られますが、信仰にとっては、とても大切なことなのです。

聖金曜日、悲しみの道を、十字架を持って歩いている人は、イエス様を追っかけている、と言うより、イエス様の気持ちになって、キリストを演じているのです。

この、キリストのマネをすることを、「霊性」と呼んでいることを、私は実感を持って受け入れていきます。そしてあちこちで話してきたように思います。

キリスト教徒はイエスのファン、と言ったネラン神父は、この霊性が、信仰にとって一番大切だ、と書いていました。それを引用します。

「肝腎なのは『霊性』と呼ばれるものだ。この奇妙なことばは、**Spirituality** の訳語である。その意味はこうだ。聖書の中にはキリストのさまざまな姿が見られるが、そのうちの一つを選びとり、そのキリスト像に従って自己の信仰を实践することである。」

私たちが、クリスチャンになった、というのは、今までの自分中心の生き方から、自分の中心にキリストを置いて、イエス様の生き方に倣う生き方に変わることです。

中世の聖人、一番イエス様に近い生き方をした、と言われるイタリアのアッシジの聖人フランチェスコは、礼拝で読まれた、マタイによる福音書10章7～19節。イエス様が12弟子を伝道に派遣する時の言葉を、自分の生涯の生き方の鑑にしました。『「天の国は近づいた」と述べ伝えなさい』とか『旅には二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない』『平和があるように」と挨拶しなさい。』などという有名な言葉がたくさん入っています。フランチェスコは、イエス様が弟子たちに命じられた言葉を、自分に語られたことと信じ、彼の生涯を、キリストの弟子、小さなキリストとして生きました。

そして、現代においてクリスチャンである私たちも、キリストの霊性を自分の中に取り込むために、生まれ変わりの洗礼を受け、そして日々イエス様に似るように、キリストの体と血である聖餐をいただいています。そして、イエス様のファンとして、イエス様のまねをして、生きてゆくのです。

私たち一人一人がキリストにならう生き方をするのと同様、クリスチャンの集団である教会が、目に見える形で、この世にキリストを指し示す存在になる時、私たちの教会は、キリストの体として、証しをするものになってゆくでしょう。

この1週間、イエス様の受難を思う時、私たちはキリストをまねるものとして成長する、イエス様のファンとして歩みたいと思います。